

東邦亜鉛

資源・製錬一体で強化

亜鉛、実収率向上図る

東邦亜鉛の丸崎康康社長は、8日のIRミーティング（決算説明会）で国内製錬事業の今後の方向性について、豪州の資源事業と



会見する丸崎社長

結びつけて競争力向上を図る考えを示した。安中製錬所（群馬県）を核とする亜鉛製錬事業では、内需見合いの生産態勢の下、有価金属の実収率を高めている。契島製錬所（広島県）を核とする鉛製錬事業では、鉱石と使用済み鉛蓄電池の両方を処理できる強みを引き続き生かす。丸崎社長は6月28日付の就任

「豪資源子会社」CBHリソースズの（亜鉛・鉛）鉱石があるのを、鉱山と製錬を合わせた競争力を検討していかねばならない」と話した。安中では「3年前から国内需要に見合った生産態勢にしており、人員も見直した」と説明。同公表データによると2016年3月期の亜鉛生産実績は年

9万8624ト、17年3月期は9万5770トで、従前の10万11万ト前後から10~15%の減産。現態勢の下、「亜鉛や（副産物の）銀の実収率を高めている」と述べている。また、スケールがゼロのため、製錬側は亜鉛相場上昇によるプラスTCを得られな

丸崎社長は「製錬側に厳しい状況は来年も続く」と観測しつつも、「鉱石の売り手であるCBHには（TC下落は）ハッピー」と収益補完の関係に言及した。また、スケールがゼロのため、製錬側は亜鉛相場上昇によるプラスTCを得られな

（熔錬費）の値下がりも頭痛の種。TCは製錬所の加工収入に当たるが、亜鉛鉱石の需給ひっ迫で17年積みベンチマークは大幅下落し、相場変動に応じてTCを加減するスケールもゼロになった。

丸崎社長は「製錬側から契島への鉱石の直接供給はないものの、鉱石とリサイクル原料の両方を使用できる強みを掲げた。電気鉛の引き合いはアジア全域で足元旺盛で、需給が引き締まっている。

から契島への鉱石の直接供給はないものの、鉱石とリサイクル原料の両方を使用できる強みを掲げた。電気鉛の引き合いはアジア全域で足元旺盛で、需給が引き締まっている。

鉛は600円上げ 建値32万円

2017年	月間平均	
6月1日	290	
22日	297	292.200
7月3日	314	
11日	319	317.500
25日	305	314.000
8月1日	314	
8日	320	318.400

三菱マテリアは8日、8月積み鉛建値をトン6000円引き上げ32万円に改定したと発表した。指標となるロンドン金属取引所（LME）の鉛現物相場の上昇に加え、為替

が対ドル円安で推移した。月内推定平均は31万8400円となった。現地7日のLME鉛現物セツルメントは2355ドルで、前回建値改定時を43ドル上回った。8日の東京為替相場（TTS）は1ドル111.75円で、前回建値改定時より0.48円の円安ドル高だった。